ゆめにっ鬼

H@ＳＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゆめにっ鬼

【Ｎコード】
Ｎ８１８３Ｒ

【作者名】
Ｈ@ＳＥ

【あらすじ】
その日も、わたしは夢を見た。
だけど、いつもとは何かが違う――。
“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”なんて、私は知らない！！
こうして、私たちと鬼の鬼ごっこが始まった。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

その日も、わたしはゆめを見た。

（ここは？）

だけど、様子が変だ。

いつもと、まるで違う夢。

いつもが、まるで私の心を映しているかのような理解が出来ない抽象的な物なら、

今日のこれは、あまりにも具体的だ。

場所は、館――だろうか？

中は小奇麗で広く、人の気配は――目の前にいる。

「窓付き？」

さびつきと、

「やっほー。窓付きー。」

うろつきさんと、

「窓ちゃん……。」

ポニ子だった。

ゆめの中では、ゆめの中の呼び名を使う様にしている。

他の人たち――うそつきさんやかざぐるまさん達はいないようだ。

「ここは――ゆめの中、だよね。」

いつからか、ゆめがつながった。

性格には、つなげる事が出来るようになった、だが。

だから、彼女達がここにいる事は不思議には思わない。

問題は、いつもとは丸々違うゆめの内容だった。

いつもと、まるで違う夢。

いつもが、まるで私の心を映しているかのような理解が出来ない抽象的な物なら、

今日のこれは、あまりにも具体的だ。

場所は、館――だろうか？

中は小奇麗で広く、人の気配は――目の前にいる。

そんな彼女たちの顔を、もう一度しっかりと見る。

「ここは――洋館の中だろうか？」

うろつきさんが、ぐるりと、館と思われるいまいる場所を見渡す。
ゆめの中なだけに、感覚的に『家』ではなく『洋館』と言っていたから、おそらくそうなのだろう。
「とりあえず――どうする？」
と、呟くうろつきさんは、すでに出口とおもわしき場所へと歩いていた。
がちゃがちゃ
扉は、堅く閉ざされていた。
「あれ？」
「もしかして――」
さびつきが、不安な顔色を見せる。
「――閉じ込められた？」
「まさかぁ、扉をつないでみたらわかるでしょ。よっと。」
と、いつものように他者（といっても私達の間柄だけだが）のゆめをつなげることができる扉を呼ぼうとする。
夢だから、こんなことをするだけで扉が生まれるのだ。

だが、扉は生まれない。

『……。』

４人の間に、沈黙が流れた。

その沈黙を破ったのは、

ガシャン！

という、何かが割れるような音だ。

「ひっ！？」

「ん？」

ポニ子が息をのみ、うろつきさんが音のした方を見てみた。

「何か――音がしましたね。」

ポニ子が、おどおどと口にする。

「じゃあ、わたしが見てきます。」

と、わたしは歩きだした。

気をつけてね～、と、うろつきさんの声が聞こえた。

廊下の広さといい、この館はかなり広いようだ。

だが、窓があまりに少ない。そんな気がする。

隣に、『図書室』と書かれた扉があった。

図書室まであるのか、と、少し気になって扉を開けようとしたが、あかなかった。

仕方なく、先へ進む。

少し歩いて、キッチンのあるリビングルームの様な部屋に着いた。

そこには、われたお皿が――

これが落ちたのかな？

いうより早く、ポニ子たちの悲鳴が聞こえた。

「ポニ子！？」

叫び声を聞いて、咄嗟に可能性（エフェクト）を発動する。

しかし、発動しない。

扉が生まれない地点で、そんな気はしていたが。

なぜ使えないのか？

そんな疑問に、彼女は走りながら考えるも、答えは見つからなかった。

さっきまでみんないた所には、誰もいなかった。

「みんなはどこに……？」

特に、ポニ子の事が心配だ。

叫んだのがポニ子なのだから。

とりあえず、こういうときは、探すに限る。

まず、自分ならどこへ逃げる？

――考えて、まず、

「そういえば……なにから逃げたのだろうか。」

思い当たる節はある。鳥女たちだ。

だけど、その気配はまるで感じない。

さて、上から行くか、前から行くか、右から行くか――

考えて、考えて、

「上からにしようかな。」

彼女達を置いてゆめから抜けようとは思えなかった。

窓付きは、妙に現実的なその階段を、しっかりとした足取りで登っ

て行った。

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃり

一つ一つ調べ、3階まで来て、ようやく一つの扉が開いた。

なんてことの無い、普通の部屋だ。

勉強机と、セットの椅子。そしてクローゼット――

そのクローゼットが、ガタンと揺れた。

「！？」

気の、せいだろうか？

恐る恐る、クローゼットに近づく。

そして、それに手をかける。

ばんっ！

恐怖をごまかすために、思いっきり、クローゼットの扉を開いた。

そこには、

「ひいっ！　……あ、あれ？　窓ちゃん？」

「ポニ子？！　一体どうしてクローゼットなんかに。」

「か、隠れてたの。」

一瞬、彼女はためらった。

だがすぐに、彼女は、恐る恐る口を開いた。

「“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”から……。」

――――――

「は？」

「だ、だから、その巨人から逃げていたの！」

だが、その姿をまだ見ていないわたしには、ピンとこない。

「そういえば、うろつきさんやさびつきさんは？」

「は、はぐれた……。」

「たはー……分かった。わたしと一緒にさがしましょう？　下手にはぐれるのもあれだから。」

はぐれないように。

というのは、本心でもあるが、建前でもある。

まず、彼女はかなりおびえていた。

そんなポニ子を、こんなところに置いていける心は持っていない。

何より、

彼女は、わたしの恩人だ。

一度くらい、恩を返させてくれても、いいでしょ？

「……分かった。」

少し考えて、彼女はうなずいた。

「そうだ、この部屋でこんなものを拾ったけれど。」

と、一つ、何かきらりと光る物を渡してくれた。

鍵だ。

そこには、『図書室』と書かれたプラスチックのキーホルダーもついていた。

「図書室――」

その名前に、見覚えがあった。

勿論、高校にも図書室はあるが、もっと最近。つい、さっきの事だ。

物音を調べに、キッチンへ向かっていた時。

そこには、『図書室』と書かれた扉があったはずだ。

「他の扉は開かなかったし――どうやら、この扉の鍵を使うしかないみたいだね。」

なんだか、ゆめだと言うのに、なんとも不自由だ。

やはり、このゆめは今までの物と根本的に違う。

今までの物が抽象的すぎるなら、

今回は、あまりに現実的すぎる。少なくとも、今までよりは。

そんな、気がした。

階段を駆け下り、例の図書室に着く。

がちゃり。

しっかり鍵はささり、まわった。

扉は、今までちっとも開かなかったのが嘘のように、すんなりと開いた。

勿論、鍵を開けたからだが。

そこは、さすが図書室だというだけあり、大量の本があった。

「ここになにもなかったら、お手上げね……。」

いざとなったら、頬をつねり、目を覚ませばいい。

と、

「（ま、窓ちゃん……！！）」

「ん？　ぅぁっ！？」

そこで見た物に、一瞬だけ声を失う。

本当に、“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”がいたのだ。

だがそれはすぐにすうっ、と消えてなくなり、何事もなかったかのようになっている。

『……。』

さて、どうするべきか……。

考えてもはじまらない。まずは、探索だ。昔やっていたＲＰＧで、

それは嫌というほど理解させられた。

適当に、本棚に目をやる。

どれも、まったく知らない本ばかりだ。ゆめの中だというのに、どれも記憶の片隅にもない。

と、

「窓ちゃん！　あったよ、鍵！」

「ホント？　――！？　危ない！」

「え？」

ポニ子が振り返るより早く、彼女の腕に手を伸ばした。

なんとか手は届き、それをぐいと引っ張る。

そこにいるのは、

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

ポニ子やさびつき、うろつきさんが離れ離れになった原因だ。

ただ、巨人というのはまさしく本当で、天井に頭がつくかつかないか、というほどまである。

アレに捕まると危ない。

頭の中のアラームが、壮絶な音を立てて注意を促していた。

「も、もう起きよう！」

ポニ子が叫び、窓付きが何かを叫ぶより早く、頬をつねっていた。

だが、

「――！？」

起きない。

起きられない。

『う……そおおおぉぉぉっ！？』

久しぶりに全力で叫びながら、パニック寸前の頭を何とかフルに使い、全力で“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”から逃げる。

ばんっ！

扉を力任せにあけて、それでも全力で逃げる。

どうして？

どうして起きる事が出来ない？

考える窓付きに、冷や汗が流れる。

発狂鳥人間は、捕まえた者を脱出不可能空間に飛ばす。

だけどそれは、可能性（エフェクト）を使ったり、最悪起きれば何とかなった。

だけど、起きられない今は？

捕まって、脱出不可能空間に飛ばされれば？

そこで、彼女は考えるのを止めた。

その思考をすべて、逃げることと走ること、引っ張る事にまわす。

ポニ子を引っ張る腕に、より一層力がこもる。

走って、

走って、

走った。

なんとか撒けた時、そこには『風呂場』の文字の書かれた扉が。

不自然に、その扉は開いていた。

「……。」

恐い。

だけど、起きる事の出来ないこの現状、早くみんなに会いたい。
その為には、どんな場所も探さないといけない。
「……。」
一度、深く息を吸って、落ち着いてから、
「調べてみよう。」
不自然な扉に手をかけながら、ポニ子の手をもう一度強く握る。
少し強く握りすぎてしまったかもしれない、と、少しだけ後悔したが、
その手を逆に優しく握り返されて、逆に戸惑った。
「い、行くよ?」
「う、うん。」
がちゃり
不自然に開いていた浴槽の扉を、ゆっくりあける。
そこは、扉に書かれていた『風呂場』の名前が示す通り浴槽があるくらいで、いたって普通だった。
強いて違うのは、かなり色の濃い水で浴槽が満たされていたことくらいだろうか。

紫

あの巨人の体色とよく似た色だった。

いや、もっと濃いだろうか。ちょっと見方を変えれば、墨でいっぱいの浴槽にも見えるかもしれない。

それだけなら、何でこんな色の水が？　程度だろう。

ただ、その水の中にきらりと光る鍵状の物体が見えたら、態度も変わる。

鍵だ。

そうだとわかった時には、すでにポニ子が水に手を突っ込んで鍵をとっていた。

恐がりなのか、行動派なのか。

ポニ子が水の中から取り出した鍵には、『屋根裏部屋』と書かれている。

「さっきの鍵には――『寝室』って書いてあるね。」

ポケットから取り出した鍵には、確かに『寝室』と書かれている。

さて、どっちから行くべきか――

ふと、手にまだ皿の破片を持っている事に気付いた。

「どうしようか、この破片。」

持っているだけで、危ない。

先はよく尖っていて、ちょっとしたものならカッターの様に切れそうだ

だけど、あの鬼に傷をつけることはできないだろう。

「……。」

でも――無いよりは、マシかな？

すっ、と、ポケットにそれを忍ばせた。

「じゃあ、どっちから行こうか。」

結局、どこにどの部屋があるか分からないわたしたちは、先に見つけた部屋に入ることにした。

とはいえ、片方は『屋根裏部屋』、当然、屋根裏にあるだろうから、必然的に『寝室』を目指していた。

上って、

上って、

見つけた。

三階、ポニ子を見つけた部屋のすぐそばだった。

あのときは、部屋の名前までは全く意識していなかったから、気付かなかった。

がちゃり

鍵はすんなり刺さり、その扉を開けた。

寝室というだけあり、中にはベッドが二つ。

机や本棚もあったが、そのくらいだ。パッと目に着くものは無かった。

だが、違和感はある。

まず、ベッドの上にある紙切れだ。

紙には――なんだかよくわからない、どこかで見た事はあるけれどそれが馴染のあまり無いものだとは分かる程度の記号が描かれていた。

Ｔやｂ、ｄを太字で書いたら、こんな形になるだろうか。

「これ、鍵盤かな？　ピアノの。」

「ピアノ？　――言われてみたら、そんな感じかな。」

でも、これがなにを指すかはわからない。

仮にピアノだとしても、そこから何を導き出せばいい。
ヒントが、少なすぎる。
と、
――？
もうひとつ、何か違和感を感じる。
この部屋に――というより、この屋敷自体、入るのは初めてのはずなのに、何かが、おかしい。
その正体は、
「？　窓ちゃん、ここだけ床の色が変じゃない？」
「え？　あ、ほんとだ。」
ポニ子が指差すところは、確かにそこだけフローリングの色がくっきりと変わっていた。
はっきりと、最近までそこに何かが置かれていたかのように。
「もしかして……。」
力一杯、ベッドを押してみる。
思ったよりもベッドは軽く、すんなり動いた。

「うわぁ……。」

「思った通り。」

ベッドの下から、下に続く穴が現れたのだ。

その下は、鍵がかかっていて入れなかった部屋だ。

そして、ここから、ピアノが見える。

「もしかして！」

先ほどポニ子は、この紙きれを見て『鍵盤』といった。

何かあるかもしれない。

そう思ったころには、既にわたしは降りていた。

「ま、窓ちゃん！」

「ポニ子は扉から入るといいよ、私がカギを開けとくから。」

だが、それより早く、ポニ子は穴から身体を慎重におろしていた。

「よっ、と……うわっ！？」

どすん

思いっきり、お尻から落ちてきた。痛そうだ……。

「だ、大丈夫？　ポニ子……。」

「なんとか。痛た……。」

なにはともあれ、無事（？）着地成功だ。

さて、探索開始だ。

真っ白な部屋に、グランドピアノが一台だけあるさびしい部屋

――というわけではなく、小さな本棚とタンスが、部屋の両端に置いていた。

この本棚も、不自然だ。

具体的には、最近動かされた、というような跡が見られたのだ。

「これも、上のベッドと同じなのかな？」

「たぶんね。よい……っしょ。」

本棚をずらす。

そこには、壁に直接埋め込まれた、ダイヤル式の金庫が。

「４桁――でたらめに数字を当てはめて答えが出るような奴じゃないよ。」

「ううん……やっぱり、これがヒントになるのかなぁ。」

ちらりと、さっき手に入れた紙きれを見る。

鍵盤。

ポニ子の考えが正しいなら、ヒントはそこにあるグランドピアノにあるはずだ。

グランドピアノの方に目をやる。

そこには――

『！』

真赤な何かが、鍵盤にこびりついていた。

「なに、これ……？」

血

そう思った、その時、鍵盤に大きな影が覆いかぶさった。

背後を見たとき――

『――！！！！！』

鬼が、立っていた。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”（後書き）

性懲りもなくゆめにっき。今度は連載。
どうも、ＨＡＳＥです。どう考えても記号四つでその子のフルネーム方式はひどいと感じ、原作名に変更。そして、青鬼とのクロスオーバー（？）です。

青鬼のような何か、ゆめにっきのような何かと考えて読んでください。

ではでは～（・ω・）ノシ

合流

残りの二人もまた、ペアを組んで共に行動していた。

「おっかしいなぁ。どうして起きることも可能性(エフェクト)を使うこともできないんだろう。」

「それが分かれば、今頃鬼の恐怖なんて無いよ。」

そんな二人は今、離れ離れになった残りの二人を探して、色々なところを回っていた。

だが、どうにもほとんどの扉は鍵が閉まっていて、開ける事が出来ない。

逆に、開く部屋はとことん調べてみた。

「――で、何で貴女はトイレから洗剤を持ってきたんですか？」

「？　これをね、床に撒いてね、あの鬼を転ばそうって作戦よ！」

そんな作戦が、うまくいくとは思えなかった。

「でもね、この館、何か大事なものばかり目立つのよ。」

「洗剤が役に立つのですか？」

「だから、さっき言った作戦よ。」

……やっぱり、その作戦がうまくいくとは思えなかった。

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃがちゃ

がちゃり

ひとつ、扉が開く。

全体的に白い色の床と壁に囲まれているため、黒い家具がよく映えた。

そんな中、入り口から直線距離上の壁に、何かがあった。

まるで額縁の様なそれには、一本の線が上から少ししたところから延びていた。

だが、それより先に目に入った事は――

「これって――この館の地図？」

「でも、これって一階部分だけでしょ？」

二人は、取り出しながら、それを眺める。

確かにそれは1階の地図で、ほとんど行った場所ばかりだ。

和室で空のライターを手に入れた途端、あの鬼から追いかけられて、辛くも逃げた事は、すぐにでも忘れたい記憶だ。

その、嫌な思い出の残る和室と和室の間。

「なんか、変な間だなぁ。」

妙に細長い隙間が描かれていた。

「設計ミスでしょうか？」

「な～んか、そんな感じじゃないよなぁ。」

疑問は、湧くばかりだった。

とにかく、これは持っていよう。

そう決断したのは、うろつきさんだった。

大事そうに、地図――と、洗剤を持って、わたしたちは部屋を後にした。

本当に、洗剤が役に立つのだろうか？

疑問に思いながらも、また開いている部屋探しだ。

がちゃり

適当に選んだ扉はすんなりと開いた。

中は、先ほどの部屋と同じように、家具は黒かった。
だけど、他のこと――床の色や壁の色は、それ以外の部屋と同じだ。
それだけ。
普通なら、それだけで終わる。
質素な部屋という感想で終わるような部屋だ。
ただ、本棚のさらに上に、何かが見えた。
「なんだろう。」
妙に意識に引っ掛かり、気になって仕方ない。
「取ってみる？　よっ、と。」
うろつきさんが、その辺から椅子を持ってきてくれた。
「これで届く？」
「ちょっと待っててください……よっ、と。」
精一杯手を伸ばし、ようやくそれに手が届く。
それは、何か液状のものが入ったケースだった。
高校生には、見慣れないものだった。

「これって、ライターオイルじゃない？」
「これが？」
うろつきさんが、適当に見ながら答える。
「うん。私と同じサークルの人が持ってた。」
「そういえば、大学生でしたね。」
などと言いながらも、先ほどから雲入手したからのライターに、ライターオイルを注ぐ。
これで、火が付くはずだ。
「さぁ、次行ってみよー！」
「……楽しんでいませんか？　うろつきさん。」
だけど彼女は答えず、先に進んでいった。
にやけた顔は、隠すつもりもなかったようだが。
と、
ドンッ！
と、近くで扉が開く音がした。
「なに！？」

ほとんど反射的に、扉を開けて様子を見る。

そこには、

『！！！！』

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

に追いかけられる、窓付きとポニ子の姿があった。

しかも、巨人とばっちり目があってしまった。

「う、うろつきさん！」

「さびつき！　急ぐよ！」

二人と合流する形で、全力疾走する。

再会を喜ぶ暇は、無い。

とにかく全力で走らないと。

走って、

走って、

走った。

「はあっ、はあっ……ふう。」

なんとか、鬼は撒けた。

付いた先は、先ほど話題になった和室の側だ。

「な、なんとか窓付き達は逃げ切れたようね。」

「うろつきさんたちこそ……よかった……。それより、このゆめ、何かが、おかしいです。」

「起きることも、可能性（エフェクト）を使うこともできない――これはいったい……。」

窓付きの説明に補足する形で、ポニ子が加える。

「分からないけれど……一番分からないのは、あの巨人だよ。」

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

「何となく、あれはまずい。そんな気がします。」

「何となく。じゃないよ！　あれは間違いなく危ない。ピエロより危ない！」

うろつきさんの言うピエロとは、彼女のゆめに出てくる鳥人間的存在らしい。

それがどれほど怖いのかは、あった事の無いわたしにはわからないが、
発狂鳥人間よりも怖いであろうという事は、すぐに分かった。
「とりあえず、情報を交換しませんか？」
お互いがお互い、別れている間に手に入れた情報を持ち出す。
「私たちは、この紙切れと、まだ開けていない『屋根裏部屋』の鍵――」
ポニ子が、二つの物をすっと広げる。
「わたしたちは、こんな感じ。」
逆にさびつきが出したものは、
オイルが満タンのライター、
地図の様なもの、
そして、なぜか洗剤。
「この洗剤を床にまいて、あの巨人を滑らそうって思ってね！」
そううまくはいかないだろう。

その場にいる全員が、心の中で呟いたことだろう。

私みたいに。

ふと、ポニ子が二枚の紙を手に取り、口元に人差し指を当てる。

考えている時の癖だ。

ちなみに、二枚の紙とはもちろん、鍵盤（と思わしき物）の描かれた紙と、さびつきの出した地図の様なものだ。

「これ……もしかして……。」

「何か分かったの？　ポニ子。」

「うん。あの、さびつきさん、そのライター、貸してもらえませんか？」

「いいけど、どうするの？」

するとポニ子は、借りたライターに火をつけ、

「こうするんです。」

あろうことか、あぶり出した。

「ちょ、ポニ子！？」

慌てて止めに入る、が、それもすぐにやめる。

見れば、そこには新たな記号が鍵盤が浮かび上がっていたのだ。
「『あぶり出し』だよ、窓ちゃん。火にかけて、文字通り書かれているものを浮かび上がらせること。」
言いながら、もう一枚もあぶり出す。
すると、不自然にできていた細い空間に、階段が浮かび上がった。
「ここに、何かがありますね。」
指差す所は、ちょうど、自分達の居る所の真後ろだった。
「どれどれ？　――あ、本当だ、ここだけ壁が不自然だ。」
壁をさすりながら、うろつきさんが言う。
「何か切れる物……。」
切れる物……その一言に、反応する。
持っているではないか、わたしは。
「あの、これを。」
差し出すのは、
「皿の破片？　うん、いいね。せぇのっ！」
鋭い破片は、いとも簡単に不自然な部分を破いた。

すると、奥から黒い扉が現れたではないか。

「ここから奥に行けそうだね。」

と、扉に手を伸ばしたうろつきさんだったが――

すかっ

ドアノブに伸ばした手は、しかし空を切った。

ドアノブが無いのだ。

『……。』

4人に、沈黙が走った。

「――これじゃあ、先に進めないね。」

「探すしかないね、ドアノブか、代わりになるものを。」

不思議なくらい、ドアノブはすぐに見つかった。

まだ開けていなかった『屋根裏部屋』に、先の無い意味の無い扉があったのだ。

「でも、これは外せないね……。」

「ネジは＋（プラス）――＋ドライバーがあれば、話は別だろうね。」

と、言うわけで、今度は＋ドライバーを探すことになった。

だけど、今いける部屋のどこにも無かった。

がちゃり

探し回って入った部屋には、本棚がいくつかあるくらいで、目当ての物はなさそうだった。

だが、その部屋の奥に、変な物が目に入った。

パズルだ。

ピースをはめて絵を完成させるものではなく、正真正銘の謎解(パズル)きだ。

額縁の下に、何か書かれている。

“真っ直ぐに伸ばして背高順に上から並べよ”

○　○　○　○　○

o　hi　na　ku　ko

「何これ？」

「真っ直ぐに並べて……何を並べるんだろうか。」

「おーひーなーくーこー。う～ん、謎だ……。」

4人が4人とも唸ってしまう。

お　ひ　な　く　こ

この単語から始まる、長さの関係あるもの――

「！」

約5分後、ふと、ひらめく。

「もしかして――」

すでに何通りか確かめてバラバラになったパズルに、手を伸ばす。

「ここを、こうして――こう！」

n
a
k
u
h
i
k
u
o

○　○　○　○　○

かちゃり、という音がした。

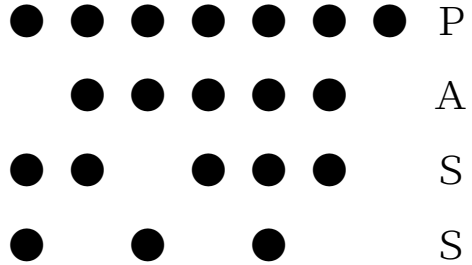
「おお、どういうこと？」

「指を見たらわかりますよ。」

じっ、と、うろつきさんは自分の手を見つめ出した。

どうやら、みんなすぐにわかってくれたようだ。

そんな中、額縁が落ち、中から●がたくさん書かれた紙が出てきた。



「今度は何の暗号だ？　またあぶり出し？」

「いえ、これは紙の種類が違うから、おそらく違うかと……。」

また、分からないものだ。

何より――

「とりあえず、ドライバーを探さないと。」

暗号解読は後にして、また部屋を回る作業を開始した。

がちゃり。

入ったのは、先ほどのピアノの部屋だ。
ここに付いている血――だと思っていたが、よく見れば、赤黒いペンキだった。
ふと、
「そうだ、誰かハンカチ持っていない？」
「あ、私もっていますよ？」
さびつきが何かひらめき、それにポニ子が答える。
すると――
「ちょっと、ごめんね。」
先ほどのなぜ持ってきたのだと突っ込まざるを得なかった洗剤を、ハンカチにかけだした。
そして、そのハンカチで鍵盤をふきだしたのだ。
すると、赤黒いペンキは徐々に落ちていき、代わりに何かが浮かび上がってきた。
９１５
これは――なにを意味するのだろうか？

それを考えるみんなの中一人、

「ほら、役に立ったじゃん？」

と、どや顔をするのは、言うまでもなくうろつきさんだった。

合流（後書き）

パズルはニコニコ動画のとある攻略動画をそのまま使用。
後、青鬼出現フラグが一部変わっていますが、そこはご愛敬。

ではでは～（・ω・）ノシ

＋ドライバー（前書き）

ガッツリネタバレしています。
閲覧注意。

＋ドライバー

がちゃり

大体の扉は、もう開くようになっていた。

入った部屋は、全体的に白く、黒い家具がより一層目立って見えた。

「ここでこの地図を手に入れたんだ。」

さびつきが、さっきあぶり出しで謎の扉の場所を示したそれを出す。

「一度、戻してみよっか。」

すっ、と、額縁の中に、先ほどの地図を戻してみる。

だが、特別何かが分かる気配はない。

「この地図を手に入れたときから思っていたんだけど、この線――」

さびつきが、中途半端なところで引かれた一本の線を指さす。

「これ、なんだと思う？」

『何かある』こと前提で、さびつきが聞いてくる。

確かに、これだけ謎だらけで、地図にあぶり出しを使うような館、

なにもない事が無いだろう。

だが、

「分からない、って言うのが、率直な意見ね。」

「線って言う事はさ、何かを分けるんじゃない？」

ふと、うろつきさんが横入りする。

「分ける？」

「うん。ほらこれ、端から端まであるでしょ？」

確かにその線は、額縁の端から端まで伸びている。

「――もしかして。ポニ子、あの紙頂戴。」

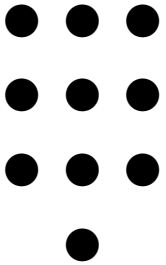
「あの紙？」

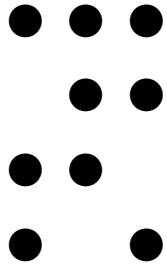
「丸がいっぱい描いてた、あれ。」

「わかった。」

かさかさと紙のこすれる音がして、すぐにその紙が手渡される。

PASS

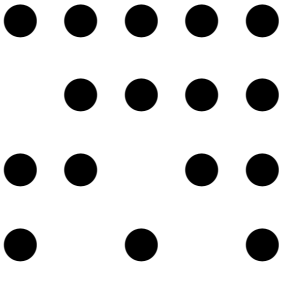




「これを――」

すっ、と、額縁に入れてみる。

すると、



線は丸を二つに分けた。

「おおお、すごいね窓付き！」

「うろつきさんのおかげですよ。」

言われて、うろつきさんはすぐに天狗になってしまった。

褒められるとのびるタイプなのだろうか。

だとすれば――いや、もう過去の事は気にしないでいこう。

「でもさ、これ、なにを意味するの？」

「う～ん、そろばん？」

またも横入りしたのはうろつきさんだった。しかも、また、確信に近いかもしれない。

「そろばんだとしたら――３９７６、かな？」

そのようすを、みんなポカンと見つめている。

「？　ど、どうしたの？」

「いや、こういうことはできなさそうなイメージだったから、ちょっと意外で。」

「失礼な。」

ただ、それ以上は言い返せないうろつきだった。

がちゃり。

一向に、＋ドライバーは見つからない。

さっきの数字も、結局どこで使うのかはわからない。

迷走を続けて入った部屋は、やはりピアノ部屋だった。

ここにある金庫。

これが何か大事な役割を持っている気がして仕方が無い。

「ここにさっきの数字を入れてみよう。」

きりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

――金庫は、開かなかった。

「……ここじゃないのか。」

となると、この金庫を開けるためのヒントは――

「９１５――。」

ピアノの鍵盤に書かれた、謎の数字。

あぶり出しで記号の増えた、暗号。

ｂに似た形の鍵盤、

Ｐに似た形の鍵盤、

Ｔを１８０。回転させたような形の鍵盤、
ｑに似た形の鍵盤が、左から順番に並ぶ、暗号。
現地点では、これだけだ。
「ドは９、レは１、ミは５――分からないなぁ。」
４人の中でもおそらく一番頭の回転が速いと思われるポニ子（窓付き調べ）も、お手上げのようだ。
さびつきはさびつきで、先ほどのあぶり出しの紙をくるくると回転させ、上下を入れ替えながら見ていた。
「こういうのは、左右逆さまから見たらわかるって気がしない？」
確かに、そういうのはある。
「ん？　逆さまに――もしかして！！」
急に何かがひらめいたのか、さびつきが慌てる。
「何か分かったんですか？」
「たぶんね。」
言いながら、さびつきは鍵盤の数字と暗号を見比べる。
「――やっぱり。」

なにが分かったのか分からないわたしたちを置いて、さびつきは一人、金庫へ向かう。

きりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきり

きり

きりきりきりきりきりきりきり

――かちゃり。

金庫が、鍵の開く音と共に開く。

「開いたよ。思った通りだ。」

その後すぐに、彼女は分からないわたしたちのために答えを教えてくれた。

ドは9、レは1、ミは5。

ここに書かれている鍵盤の絵をそれぞれ『A』、『B』、『C』、『D』として、

『A』は「ド」の形だから【9】、

『B』は「ミ」を180。回転させた形だから【5】を180。回

転させて見える数字――つまり、結局【５】、
『Ｃ』は「レ」の形だから【１】、
『Ｄ』は「ド」を１８０。回転させた形だから【９】を１８０。回転させて見える数字――つまりは【６】となる。
つまり、この金庫の数字は『９５１６』となる。
「なるほど、さっぱりわからん。」
さっきのひらめきはなんだったのだろうか。
そう疑問に思わせるようなうろつきさんの発言が、場の空気に脱力感を与えた。
「どれどれ――」
開いた金庫の中に入っていたのは、
「『子供部屋の鍵』だったよ。」
がちゃり
子供部屋と書かれた扉に、先ほどの鍵を差し込む。
中は、子供部屋というだけあり、勉強机が置かれていた。

ただ、『子供』部屋というには、少々不釣り合いな大きさのソファが気がかりだ。

「なんだろう、あのソファー……。」

「最近の子はずいぶん贅沢なんだねぇ。」

やはり、どこかずれているのだろうか、うろつきさんは。

とにかく、このソファーを調べてみよう。

注意深く調べてみると、あっさりとおかしな所は見つかった。

妙に膨れた部分と、すぐ近くにある綻び(ほころ)。

何かを、突貫で入れたような跡。

がっ！

鋭くとがった割れた皿をいつまでも持ち歩くのは、あまりいい気分ではない。

だけどこうして、活躍している。

綻びを広げ、中になにがあるのかを確認する。

「――あった……！」

＋ドライバー

探していたものだ。

これで――ドアノブが手に入る――！

だが、感動もそう長くは続かなかった。

代わりに、恐怖と絶望が押し寄せてきたからだ。

がちゃり

扉が開く。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

見るまでもなかった。

その巨体は、そこにいるだけで異常な緊張感（プレッシャー）を放つ。

一瞬、息が止まるかと思った。

息がつまり、しゃっくりとなって吐き出される。

「――――！」

逃げて！

誰かが叫び、誰もが叫んだ。

同時に、いくつもの動き(アクション)があった。
私達は一斉に一か所に集まり、
同時に、それを襲う形で巨人が迫った。
巨人は、その巨体に見合った力を持つようで、ソファーを踏みつけ、
一瞬で中のスプリングまで弾けさせた。
だが、それがほんの一瞬でも相手の足止めになった。
ドゴバギッ！
ソファーが見るに堪えないほど無残に朽ちた音を合図に、
走った。
その大柄な身体があだとなったのか、振り向くのに時間を有した。
その瞬間を利用し、扉の外へ逃げ込む。
扉を閉めて閉じ込める――そんな考えは、一瞬たりとも浮かばなかった。
走らないと、まずい。
分からない恐怖が、わたし達により一層緊張感(プレッシャー)を与える。
――死――

分かりやすい緊張感（プレッシャー）だ。

本能か直感か、わたし達は『死』を感じていた。

その『死』から逃げる形で、走った。

走って、

走って、

走って、

走った。

――どれほど走っただろうか。

もう息も絶え絶えで、今襲われれば、間違いなく――

そこで、一息つく。

ぐるり、と、周りを見渡す。

さびつき

うろつきさん

ポニ子

――よかった、誰もはぐれていないようだ。

ぜぇはぁと荒い息を吐きながら、安堵の笑みを浮かべる。

「よかった――みんな、無事で。」

とにかく、今は動けない――少々怖いが、ここで休むとしよう。

全力で逃げているうちに、寝室まで逃げていたようだ。

二回から三階へ逃げるだけで息が上がるという事は、おそらく、一度下に降りてから階段を駆け上がったのだろう。

恐怖心も、息切れを手伝ったかもしれない。

でも――

――よかった――

一息付き、屋根裏部屋へ向かう。

一つ階段を上がるだけだったから、少しは楽だった。

かちかちかち

かたん、と音を立てて、ドアノブはあっさりと取れた。

これを使えば、あの扉の向こうに行ける。

なにがあるかは分からないが、そもそもここ事態が分からないのだから今さらだ。

「行こう、みんな。」

一通り顔を見て、扉を開ける。

一階にあった、謎の扉へと。

＋ドライバー（後書き）

謎解き回＆ａｍｐ；本館編最終回。
鍵盤の謎の説明に少々困ったけど、これでわかるかなぁ……。特にメモの鍵盤の形の例えが不安だったり……ｗ

ではでは～（　・ω・）ノシ

逆転数式（前書き）

閲覧注意。ネタばれです。

逆転数式

かちゃかちゃ

同じ規格の扉だったため、ドアノブは何の問題もなく取り付ける事が出来た。

奥は薄暗く、肌寒い。

「ここは、地下室のようだね。」

さびつきが、そのアルビノのように真赤な目を凝らしながら言う。

「ここにいても始まらないし、先にいこっか。」

「……うろつきさん、正直、楽しんでいるでしょ。」

「まっさかぁ。」

これは間違いなく、楽しんでいるな。

さびつきは、そんな言葉を心の中だけに押しとどめた。

すぐに、扉についた。

【Ｐ　Ａ　Ｓ　Ｓ】

１２３

４５６

７８９
０

十の数字が書かれたボタン。

どうやら、数字を入力するタイプの鍵のようだ。

「妙に新しいものもあるんだなぁ。そんなことより、たぶん、これがその数字だよね。」

カタカタと、うろつきさんがボタンに手をかける。

「さーんきゅーうろーくなーな……っと。」

鍵はかちゃりという音を立てた。どうやら、鍵が開いたようだ。

「びんご！　やった――よ……！」

うろつきさんの声が、次第に小さく、しかし切羽詰まったものに変わる。

それがなにを意味するのかは、カタカタというううろつきさんが歯を打ち鳴らす音を聞くより早く分かった。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

扉を力任せにあけて、わたしたちは全力疾走で逃げる。

先ほどとは違い、正真正銘、右も左もわからない所だ。
はぐれないように慎重に、
しかし鬼に追いつかないように全力で、
走って、
走って、
走って、
走った。
もう――いやだ……。
走りたくない。
追いつかれても、もう――
そんな気の迷いが生じかけた時、鬼がいなくなっている事に気付いた。
どれほど走ったのだろうか。
幸いみんな無事だったし、何より鬼がいない。
一息、二息、三息……ふう、落ち着いた。
辺りをぐるりと見渡す。

椅子と机、本棚があるくらいの、質素な部屋だ。
その、本棚の上。
何かが、きらりと光った。
「なんだろう？」
「取ってみる？　よっ、と。」
うろつきさんが、その辺から椅子を持ってきてくれた。
「これで届く？」
「ちょっと待っててください……よっ、と。」
精一杯手を伸ばし、ようやくそれに手が届く。
それは、金属の棒だった。
――いや、よく見るとそれは――
「これ……－ドライバーの芯だ。」
「－ドライバー？」
さびつきが、首をかしげた。
なんでこんなところに－ドライバーの芯が……。

考えていた時、
かちかちっ
一瞬だけ、上の電灯が瞬いた。
「きゃっ？！」
「お、落ち着いてポニ子。」
「窓っちもね～。」

少し、探った方がいいだろう。
そういった結論が出された。
幸いというべきか、大体の部屋は鍵が開いていた。
ただし、先に進むためにあるであろう扉だけは、開かなかった。
ここを開かないと詰まる。
そんなこと、火を見るより明らかだ。
そんな部屋の一つに、変わったものがあった。
いや、部屋自体は変わっていない。

部屋に置かれた机に書かれたものが、変なのだ。
デジタル文字をアナログな方法で荒く書いた数式だ。
ただし、式は成立していない。
６９１２＋２８６５＝１５１８
何を意味するのだろうか。
と、
「ねえ、あっちの上に何かあるよ？」
「分かった。まってて～。」
……この式はともかく、
高いとこの物＝椅子＝うろつきさんという謎の方程式が、知らないうちに構築されていた。
少しして、ポニ子が何かを持って帰ってきた。
赤い本――いや、日記帳か。
中を読んでも、ほとんどのページが白紙だ。
ただ、一ページを除いて。
×××＝１９５５

またしてもデジタル文字だ。
しかし、これだけじゃない。
隣のページは、破られた跡があった。
破られた先が無いと、この数式は解けない。
この館の主は、どこまでひねくれた性格なのかと疑いたくなる。
これであの巨人が正真正銘この館の主なら、それはそれで――いや、やっぱり怖い。
さて、この数式が分からない今、この部屋に残る理由もない。
別の所を探すことにしよう。
わたしは、部屋を後にした。

あの巨人がいつ来るかわからない事は確かに怖いが、
それ以外に対しては、さほど恐怖心を持たなかった。
少なくとも、わたしは。
――もちろん、『さほど』だが。

本棚に、何かが無造作に置かれていた。

「これは……紙切れ？」

＋１５６２

デジタル文字で書かれているそれは、どう考えても――

「さっきの日記の千切れた部分……？」

ためしに、その部分と合わせてみる。

×××＝１９５５＋１５６２

……ビンゴ。

ふと、紙切れが元あった場所を見ると、何かスイッチの様なものが。

「……。」

恐怖半分、興味半分で押してみる。

すると、本棚はゴゴゴと音を立てて、横へずれていった。

音を聞きつけ、みんながやってくる。

「みんな、これ……どう思う？」

そこには、奥に続く小さな道があった。

単なる廊下サイズだったその道は、すぐに隣の部屋へとつながった。
正真正銘、なにもない部屋。
物置にでも使うつもりだったんだろうか。
わたしがそう思った時、ポニ子が何かを見つけた。
「あの鉄板……何か、不自然じゃない？」
指差す所には、＋のネジで後付けされたような長方形の鉄板が。
「『何かを隠しています』っていうようなものだよ、あれは。」
隣で、アルビノの様な真っ白の紙を揺らしながら、さびつきが近付く。
と、
かちかちっ――ぷつん――
急に、目の前が真っ暗になった。
目の前どころじゃない。
真っ暗闇になったのだ。
「な、なに？」

ポニ子の慌てる声が聞こえる。

「あわてないで！」

うろつきさんの声が聞こえたかと思うと、

ぼっ

と、火の付く音がした。

「ライターの明かりを頼りに、わたしの所まで来て。」

ゆらゆらと揺れる小さな明かりと、

うろつきさんの声が、

これ以上ないくらい、わたしたちの心を落ち着かせてくれる。

この時ばかりは、さすが最年長（おねえさん）だ、と思った。

だけど、

「さすがにこう暗いと、ドライバーを使った作業はつらいかな。」

どうにかして、明かりを取り戻さないといけない。

その為には――

「さっき、向こうにブレーカーのある部屋があった。そこまで、壁伝いに行かないと。」

「わかった。」

わたしたちは、四人がはぐれないよう、強く手を握りながら、この暗闇に身を乗り出すことを決意した。

壁伝い

停電などに慣れていない都会暮らしの自分には、

この行動になれるまで時間がかかった。

ゆっくり、慎重に。

暗闇というのは、どこまでも人の心を不安にさせる。

あの暗闇の向こうでは、

あの巨人がわたしたちに襲いかかるタイミングを見計らっている。

そんな感じさえした。

とにかく、急がないと。

「あった！」

うろつきさんのその声が、暗闇に木霊する。

そして、

ガチャリ、

という音とともに、一つの部屋に入る。

「た、し、か……あったあった。んしょ！」

がこんっ

と、何かが持ち上がる音がした。

それと同時に、部屋は明るくなった。

だが、そのおかげで、みたくなかった物が目に入る。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

そいつが、そこにいた。

『――っ！！！！』

そこからのみんなの動きは、早かった。

巨人が、まるで丸のみでもしようかという勢いで、大口を開けて突っ込んでくる。

それを、全員が全員、すんでの所でよける。

巨人はそのまま勢い余って、頭から壁に激突した。

どすんっ

部屋が揺れて、電灯が再びチカチカと瞬いた。

もしわたしが、

あと1回でも発狂鳥人間とあっていなければ、

逃げていなければ、

今の動きは出来なかっただろう。

「つかまって！」

と、言いながらも、わたしの行動は真逆だった。

ポニ子の手を、強く握る。

離さない。

ぜったい、逃げる！

全力で走りながら、決意する。

その瞬間にも、背後からは驚異的な緊張感（プレッシャー）を感じる。

あれは、

あの巨人は、

追いかけてきている。
しつこく、
しつこく、
しつこく、
しつこく——！

「だ、大、丈夫？　ポニ、子。」
ぜぇはぁと息を切らし、なんとか巨人から逃げきる。
「う、うん。なんとか、ね。窓ちゃんの、おかげだよ。」
と、ポニ子はずっと私が握っていた手首をさすりながら答えた。
「あ……強く握りすぎた？」
「ううん、問題無いよ。」
「……そっか、よかった。」
ほっと、一息。
だが、直後に安心できない事態に陥った。

「――あれ？　うろつきさん？　さびつき！？」

二人の姿が、見当たらないのだ。

もしかして――

そんな嫌な予感が、わたしの心の中で渦巻いた。

そんな窓付きの不安は知らず、二人は二人で、また別の部屋に逃げ込んでいた。

「窓付きたちは大丈夫だろうか……。」

「きっと大丈夫でしょ、あの窓っちだよ～？」

そうだといいけれど……。

不安は、募（つの）るばかり。

だけど、今この扉を開けた先にあの巨人がいるかもしれないと思うと――

そう思うと、身体が不自然にふるえた。

「うろつきさんって、意外と薄情者ですか？」

「とんでもない、信頼と信用の裏返しと言ってほしいな。」

……。

「なんか、釈然としないなぁ。」

「……。」

少しの沈黙。――気まずい。

ふと、自分が腰かけていた机に、何かが書かれている事に気付いた。

それは、デジタル文字をアナログな方法で荒く書いた数式だ。

ただし、式は成立していない。

６９１２＋２８６５＝１５１８

――数式。

これは、わたしの得意分野だ。

もっとも、ポニ子や窓付きよりは、という程度だが。

むしろ、これは数式というよりも、

「謎解（パズル）き。」

まず、ひっくり返してみ――たいところだが、机を動かすのは一苦労。

なので、仕方なく机に上り、逆さまから見る。

『解けない数式』系のパズルの基本的な解き方だ。

８１５１＝５９８２＋２１６９

大当たり。

逆さから見れば、デジタル文字はまた違った数字を現す。分かりやすいのは、６と９だ。

「さびつき？　どったの、そんなガッツポーズを上げてもおかしくない様などや顔して。」

「どやって……。」

他に表現方法は無かったのだろうか。

……どんな顔していたのかな。

とにかく、

「８１５１。」

これが、何かしらに関係してくるのは確実だろう。覚えておいて、損はない。

その時、

どん

扉をたたく音。

その瞬間、二人の肩が同時にはねた。
さらに容赦なく、その扉が開かれる。
心臓に、鈍い痛みが走る。
今はなんてことないが、これでも元重病患者だ。
こんな心臓に悪いこと、したくないのに――
「――……っ。」
息をのむ音が、嫌に鮮明に聞こえる。
うろつきさんもまた、すぐに動けるように体制を整える。
――――っ……――
冷汗が、首筋をくすぐった。
だけど、そんな事に気をまわしているほど余裕はない。
ぎい……っ
扉のきしむ音が、部屋の緊張をさらに加速させる。
「――。よかった！　いたよ窓ちゃん！」
「ポニ……子？」

それがポニ子だと気付いた時、肩から力が抜けるような感覚がした。
同時に、『ああ、よかった。』と、安堵のため息をつけるだけの余裕も取り戻した。

「この机の暗号が解けたの？」
わたしたちがはぐれている間に、
さびつきは私が解けなかった暗号をいとも簡単に解いてしまっていた。

「うん。これを、こうして――こう。」
逆さから……あのときは、そこまで余裕が無かったとはいえ、そんな発想は無かった。
さすが、というべきか。
ふと、
「そういえば、あの鉄板の先は、まだ調べていないな。」
「あの怪物がいない、今のうちに！」
ポニ子が、扉から身を乗り出して確認しながら先を行く。
彼女の行動力は、どこから来るのだろうか。

それとも、恐怖も喉元過ぎれば何とやら？

とにかく、彼女の言うとおりだ。

さっさと、この館を脱出しよう。

――。

わたしも、喉元過ぎれば、なんとやら？

鉄板をとめているネジは一（マイナス）。

さっさとネジの芯を入れ替えて、さっさとこれを外してみよう。

かちかちかち

ごとん

あっさりと鉄板は外れ、奥から金庫が現れた。

数字は、４桁。

「これが、さっきのかな？」

さびつきが、ダイヤルを回す。

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きり

きりきりきりきりきり

きり

――しかし、鍵は開かない。

「あれ？　絶対ここの数字だと思ったのになぁ……。」

「――もしかして。」

ポニ子が、預けていた赤い日記帳をとりだす。

先ほどの破れたページと合わせて出来上がる、一つの数式。

×××＝１９５５＋１５６２

８５１２

「８５１２だね、分かった。」

金庫の鍵を担当するさびつきが、ダイヤルを回しだす。

きりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきり

きり

きりきり

――しかし、鍵は開かない。

「え？」

「これでも、ない？　……となると、いったいどれが……。」

８１５１でも、

８５１２でもない。

では、残る数字はいったい――

そこで、何かが閃いた。

「さびつき、ちょっといい？」

「何か、分かったの？」

だけど、それにこたえるよりも先に、わたしはダイヤルを回しはじめた。

きりきり

きり

きりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきり

――かちゃり。

金庫の鍵の開く音がした。

「２１５８？」

「うん。もしかしたら、『もう一回反転させるんじゃないか』って思って。」

「すごいね、窓付き。」

「さびつきのおかげだよ。さびつきが一番最初にあの机の答えを導き出す方法を教えてくれていなかったら、答えられなかったからね、きっと。」

実際、ただの馬鹿の一つ覚え。

同じことをもう一回やっただけなのだから。

「それでもすごいよ窓ちゃんは。」

「……ありがと、ポニ子。」

「それで、中身はなんだったの？」

うろつきさんが、背後から身体を乗り出して金庫の中を覗き込む。

そこにあったのは、鍵だ。

「――『別館』――。」

『……。』

４人に、沈黙が流れる。

どうやら、まだ出ることはできそうにない。

逆転数式（後書き）

はい、次で最終章『別館編』突入です。ＨＡＳＥです。
『きり』の音は、単純にその数だけ書いているため、実際はもっとくるくる回っているでしょうなｗ

たった一話の地下室編、ありがとうごじゃした。
ではでは～（・ω・）ノシ

抱擁（前書き）

閲覧注意。
ほんの僅かに百合くさいです。

抱擁

すぐに、『別館』へ続く扉は見つかった。

既に、『恐怖』と言う一つの感情だけで、フルマラソンをしたのかと思うくらいに疲れている。

だけど、休んでいる暇はない。

その『恐怖』という感情が、わたしたちにそう訴えかける。

“ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人”

まず間違いなく、私達の新しい精神的外傷（トラウマ）となるであろう、化物。

その精神的外傷（トラウマ）にまた出会う前に、早くこの館から出たい。

そのためにまずやるべき事は一つ。

この扉をあけて、先へ進むことだ。

がちゃり

そこに広がるのは、

さっきの『本館』よりも広く、

さっきの『本館』よりも不気味な空間だった。
床は血のように赤い絨毯が敷かれ、
電灯は点いている筈なのに嫌に暗い。
総じて、酷く不気味だ。
ここに小さい子がくれば、間違いなく泣きだすだろう。
「ひどく暗いわね、ここ。」
さびつきが、そのアルビノのような髪を揺らしながらあたりを見渡す。
「それに、すごく不気味……。」
呟くポニ子のその声は少しだけ震えていた。
わたしだって怖いし、うろつきさんだってさびつきだって、まず間違いなくここは恐いと思っているだろう。
「とにかく、早くここから出れるように、出口が無いか調べよう。」
わたしたち4人は行動を開始する。
階段を上ってすぐのところに、窓があった。
最初はここから抜ける事は出来ないかと思ったが、鍵が無い。

なら、たたき割って脱出できないかと思った。
だけど、窓は非常に硬く、女の子４人の細腕程度で割れるようなものではなかった。
「窓から脱出するのは諦めよう……。」
さびつきの残念そうな声が、暗い洋館に響く。
外は、雨だ。
仕方なく、左の部屋から調べる。
大きな暖炉と巨大なテーブル。
一体最後に使われたのはいつなのだろうか、
ポットに入った紅茶は、未だにその鮮やかな紅を残していた。
まるで、つい先ほどまでそこでお茶を飲んでいたかのように。
ぼすん
何かが、どこかに落ちる音がした。
それが、『暖炉に例の怪物が落ちた音』だと気付くのに、１秒と必要無かった。
その瞬間、わたしたちは動いた。

ただし今度は、さっきまでと違う状況だ。
なぜなら、
扉側に近かったわたしはポニ子の手をすぐにつかんで走った。
だが、さびつきとうろつきさんは、
扉よりも向こう側――ちょうど、あの怪物を中心にした時にわたしの真反対――にいる。
扉に向かって逃げる事は出来ない。
逃げて。
さびつきかうろつきさんか、はたまた両方か。
悲痛と諦めの色が、その声には出ていた。
二人を置いて行きたくはない。
だけど――
悲痛と諦めの色の出ている、その声には、
しかし力が宿っていた。
逃げて。

その言葉通り、

『――っ！』

わたしは、ポニ子の手を強く握り、扉を力任せに開けて逃げる。

二人とも、どうか――

どうか、無事に――！

届かぬ願いではないのだろうかと思いながら、

だけど私は願うのを止めなかった。

「どうするよ、これ。」

絶体絶命。

その言葉をこれほど身をもって感じた事は無い。

横には、わたし共々逃げ損ねたうろつきさん。

選択肢は幾つかある。

あの怪物をくぐりぬけて脱出しようとするか、

背後の穴に飛び込むか。

もし、この状況で前者を選ぶなら、

そいつは間違いなく気が狂っているか、神様だ。
わたしは、気が狂っていなければ、
神様なんてものでもない。
ただの人間。
目の前で、いまにもその大口でわたしたちの頭を喰わんとばかりの
この鬼に対して、
『逃げる』ことを考えるただの人間。
「うろつきさん！」
「うん！」
幸か不幸か、あの鬼は窓付きたちではなく、わたしたちを選んだ。
そして、距離はほんの少し。
あの怪物とも、うろつきさんとも。
怪物が、襲いかかってくる。
それを、わたしたちはすんでの所でよけることに成功した。
もう、背中は冷や汗でびっしょりだ。

一目散に、穴に向かって走る。

たんっ

加速をつけて、走り幅跳びの要領で穴に飛び込む。

無我夢中。

これを国語が好きな誰かが見たらこんな単語が出てくるだろう。

とにかく無我夢中に走り、跳んだのだ。

身体が銅像の様なものに引っ掛かり、勢いが落ちた。

だがそれが逆に功を奏し、跳び過ぎだったらしい勢いが殺され、穴に落ちる。

銅像ごと、わたしたちは落ちていく。

ゴドン

真っ暗な部屋に、物音が響く。

痛い。

恐い。

周りが、見えない。

手には、生暖かいものが流れる。

――血――

それが、一緒に落ちた銅像の破片によって腕に傷がついたのだと気付くのには、かなりの時間を必要とした。

「（な、んで、血、が……）」

暗闇の中でもそれが血だとすぐに分かったのは、それだけネガティブな思考に走っていたからだろうか。

「そう、だ……うろつき、さん……？」

痛む身体を何とか動かし、辺りを見渡す。

真っ暗なため、ほとんど何も見えなかった。

が、

「さびつき？　どこ？」

声がする。

うろつきさんの声だ。

なんとか、場所を示さないと。

何かないものかと、ポケットの中を探す。

すぐに、ある物が手に当たる。
ライターだ。
ボッ
すぐにそれに火をともす。
「そこ？　さびつき？」
「はい！　わたしです！」
うろつきさんは、無事だった。
あの怪物から逃げ切った。
その事実が、じわじわと彼女達を安堵させてゆく。
「うわっ？！」
突然、うろつきさんが抱きついてくる。
何事かと思ったが、
「よかった……本当に、よかった……。」
「……。」
――そうだ、うろつきさんだって、不安だったに違いない。

こんなわけのわからない怪物の居る館で、脱出ゲームの様な真似事をする羽目になったのだから。

それに彼女はこのなかで唯一の大学生、

もしかしたら――本当にもしかしたらだが、この人なりにわたしたちを安心させようとがんばっていたのかもしれない。

そう思えばあの少しふざけたような仕草も、そう見えてくるから不思議だ。

ほとんど何も見えない、ライターの火が小さく揺らめく暗闇の中、彼女達は確認し合う様に身を寄せあった。

だが、そんな安堵の時もほんの一瞬。

がたん

『！！』

一瞬、どこからか音がした。

外に何かいる――

漠然とだが、そんな気がした。

外に出られない。

周りをライターの頼りない火で照らして見渡すが、

ドアは、一つ。

絶望

恐怖

死

扉の向こうに、それがある気がする。

そして脱出経路は、そこしかない。

残念ながら、私達が落ちてきた穴はかなり高くにある。

肩車してよじ登っても、その後に手が届かない。

台の様なものも、見当たらない。

『……。』

二人に、沈黙が訪れる。

何かを考えているのではない。

絶望で声が出ないのだ。

どうすればいい。

どうすれば、いい。

どうすれば――

そして――

ばたん

扉の開く音がした。

「さびつき……うろつきさん……！」

一方、暖炉のある部屋からの脱出に成功したわたしたちは、３階にいた。

さっき、穴のあいた地面を、木箱でうめてライターオイルを見つけた所だ。

だが、肝心のライターは、さびつきが持っている。

そもそも、あのライターは先ほど満タンだったから、

もしかしたらこれはいらないかもしれない。

……さびつき……。

……うろつき……さん……。

声に出しているつもりなのに、耳に届かない。

声が、声として出ていないのだ。

泣いていた。

気がつけば私は、泣いていた。

……さびつき……。

……うろつき……さん……。

もう一度、二人の名を呟く。

だけどやはり、耳には届かなかった。

代わりに耳に届いたのは、

「……窓ちゃん……。」

ポニ子の声だった。

「……きっと、大丈夫だよ！」

ポニ子が、大きな声で言う。

「あの二人だよ？　うろつきさんもさびつきさんも頭がいいじゃん。きっと、なんとか逃げるための打開策があったからわたしたちを逃がしてくれたんだよ！」

後に『――たぶん。』と付けた事を、わたしは聞き逃さなかった。

なおもポニ子は言葉をつなげるが、わたしには聞こえなかった。
これが、彼女がわたしを元気づけようとしている事は、理解している。
だけど――
「――どうして？」
「え？」
「どうして『大丈夫』なんて言えるの？　相手はあんな化け物なのに！」
さっきまでまともに出なかったわたしの声は、
今は、うるさいくらい大きく出せる。
「どうして『大丈夫』なんて言えるの！？　相手はあの化け物なんだよ！？　ポニ子も見たでしょ？　あの化け物の姿を。その姿を思い出しても、まだ二人は無事だなんて言えるの！？」
感情的になってしまります。
ああ、最低だわたし。
さびつきの事も、うろつきさんの事も信じていないなんて。
それに、

ポニ子に――

わたしの、恩人に、今、こんな言葉を吐いている。

ああ、最低だ、わたし。

でも、口は止まらない。

「そうだよ……無事なわけが無い……あの怪物に食べられたんだよ……そして次はわたしたち……う、ぅうあああっ、あああぁあっ！！」

叫び声が、のどを痛めていく。

ああ、最低だ、わたし。

ポニ子はきっと、わたしの事を、嫌うだろうな……。

「窓ちゃん……。」

呟くポニ子の声は、怒りや苛立ちといったものより、

むしろ、悲しみ、といった色が強かった。

「ねえ、ポニ子、貴女もほんとはそう思って――」

言いかけて、言葉が止まる。

ポニ子が、わたしに抱きついていた。

優しく、ふんわりと。

「窓ちゃん……落ち着いて……。」

「ポニ子……でも……。」

「きっと、大丈夫。あの二人だもん。」

ポニ子の声は、わたしに対する怒りなど、微塵も含んでいなかった。

ただ純粋に、あの二人が無事だと信じているのだ。

ちょっと前まで、わたしもそれを願っていたように、

彼女は、本気で二人が無事だと信じていたのだ。

「……ポニ……子……。ごめん……。」

その言葉に、ポニ子はただ小さくうなずいてくれるだけだった。

「……う……うう……。」

――ああ、

やっぱり、最低だ、わたし。

「……う、うぅ、うあああああああっ！」

泣けば許してもらえると、思っているのかもしれない。

何を、

誰に、

どうして、

どうやって、

許してもらうのか。

それは、分からない。

だけど、わたしの涙腺は簡単には元通りに放ってくれなかった。

「あああ、あああああっ！」

叫びに近いわたしの泣き声が、薄暗い部屋で木霊する。

それをポニ子は、自分の服が涙でぬれることなどお構いなしに、

わたしごと、受けとめてくれた。

――なんだよ。

“ポニ子はわたしの恩人だ。”

“一度くらい、恩を返させてくれても、いいでしょ？”

――なんだよ。

恩を返すどころか、

今また、彼女はわたしの恩人になってくれているじゃないか。

最低だ。

わたし、最低だ。

一方的に、彼女に助けられてばかりだ。

わたしはその恩を、今、仇で返そうとしていたんだ。

――ああ、

やっぱり、

わたし――

抱擁（後書き）

どうも、ＨＡＳＥです。
“ほとんど何も見えない、ライターの火が小さく揺らめく暗闇の中、彼女達は確認し合う様に身を寄せあった。”
のところ、身を寄せ合ったが最初『抱き合った』だったという裏話。
最初こう書いて、文字読みながら、

（；＾ω＾）＜おー、あぶないあぶないあぶない。

となったそうなw

ではでは～（・ω・）ノシ

すれ違う謎（前書き）

-１１／１２／１６追記※致命的なミスを発見、修正しました。

すれ違う謎

ばたん

扉の閉まる音がする。

これが、合図となった。

「ぷはっ！　――もう、大丈夫かな？」

「たぶん、ね。」

深く、深呼吸する。

恐怖で、どうにかなりそうだった。

そんなわたしたちが入っていた場所は、

箪笥（たんす）。

あの怪物の気配が扉の向こうから感じられた時、

咄嗟に、近くにあった大きな箪笥に飛び込んだのだ。

勿論、考えがあったわけじゃない。

本当に、咄嗟に、だ。

あの時自分がなにを思って飛びこんだのかは覚えていない。

絶望

恐怖

死

それらから逃げるために、逃げ込んだ場所。

それが箪笥とは……。

少々、生き残る事に必死すぎただろうか？

――まさかポニ子が同じように本館で箪笥に隠れていたなど知らず、そんなことを思う。

別に、恥ずかしい事じゃない。

生き残ることに必死になるのは、人間の性（さが）だ。

自分に、言い聞かせる。

ふと、手には慣れない感触が。

木製の人型の物体だ。

箪笥の中に入った時、偶然引っ掛かったものだ。

最初、それが何かはわからなかったが、
暗闇の中手で探り、それが人型の人形である事は分かった。
ついでに、もう一つ。
青い石。
いや、珠と言った方がいいくらい綺麗に整った球状だった。
おそらく、例の石像にはめ込まれていたものだろう。
何の偶然か、はたまた運命か、
わたしのポケットの中に入っていた。
「とにかく、ここを出ましょう、うろつきさん。」
「そうだねー。さびつき、明かりをお願い。」
「はい。……？」
おかしい。
「どったの？」
「火が……点かない。」
『……。』

沈黙。

ただでさえ暗い部屋が、より一層暗く感じられる。

「……て、手探りでいこう。」

「そ、そうですね。」

仕方が無い。

オイル切れなのだから。

「……ごめんね。」

「ううん、いいよ、窓ちゃん。」

しばらく泣き続けて、ぐしゃぐしゃになったわたしの髪を軽くなでながら、

ポニ子は優しくそう言ってくれた。

ひどい事を言った、わたしを、

許してくれたのだ。

「でも、もうあんな事は言わないでね。」

「うん。」

「じゃあ、二人を探そ、――脱出するよ、必ず。みんなで！」

みんなで

その部分を強調して、ポニ子が言った。

立ち上がり、わたしに手を差しのべながら。

「――うん！」

また、救われたや。

彼女を救い返す時なんて、来るだろうか？

恩を、返せるのだろうか。

――いつか必ず、返すさ。

自分に言い聞かせ、二人を探すために部屋を出た。

探しているうちに、一階まで来ていた。

外は、雨だ。

相変らず、この窓は割れる気がしないし、割れるほど脆くもない。

廊下は二手に分かれ、すぐに行き止りになっていた。

その行き止りには扉が。

まずはどっちから行くか。

少し考えて――

「右から行こう。」

がちゃり

中は他の部屋と変わりなく、暗い。

もともとなんの部屋だったのか、

狭い部屋の中には、ほとんど何もない。

壁際にある長机の上に、いくつか人形が置いてあるくらいだ。

「素描(そびょう)人形？」

……素描って何？

なんて分からないでいる私を置いて、ポニ子はその素描人形なるものを見ていた。

「変なポーズ、何の意味があるのだろうか……。それに――」

彼女は、二つある人形のうちのひとつを手に持ち、

「こっちの人形の目――なんでくぼんでいるんだろう。」

手に持つ人形の眼は、確かに綺麗にまるくくぼんでいた。
何かをはめるかのように。
『……。』
とはいえ、
たとえ本当に何かをはめるのだとしても、
肝心の『はめる物』になりそうなものを持っていない。
丸い物……、
見つけたら、拾っておこうか。
「この部屋には他に何もなさそうだね、今度は、左の部屋に行ってみよう。」
ポニ子が言い、わたしはうなずいた。
やはり左の部屋も、これといったものはなかった。
右の部屋と同じように、人形が置かれた長机がたくさん置かれているばかり。
ただ違うことと言えば――
「パズル？」

壁にある謎解(パズル)きくらいだろうか。

真ん中に人の身体が、

右下に頭が。

そして、それぞれがスライド式に動くようになっていた。

中心にある体には、ご丁寧に頭の部分に穴があいていた。

ここまで、この頭を持ってくるのだろう。

ためしに、一つスライドさせる。

がしゃこん。

身体で言うところの足に当たる部分のブロックが動き左にずれる。

先ほどまで足があった所に頭が入る。

がしゃこん。

またスライドさせる。

がしゃこん、

がしゃこん、

がしゃこん。

いくらか動かし、ある事に気付く。

「このパズルは――絶対に解けない。」

「え？　――あ、本当だ。」

そう、絶対に。

どうあがいても、頭を指定の場所にスライドだけで持っていくことなどできない形をしているのだ。

「このパズルは――なんのためにあるのだろうか。」

設計者のミス？

――まさか、それは無いだろう。

何か、ある。

この奥に、何かが。

――……。

でも、このパズルは解けない。

どうやっても。

何がある？

何が――

「……考えていてもしょうがない、そろそろ、二人を探しに戻ろう。」

「うん、そうだね。」

わたしが言い、わたしたちは部屋を後にする。

あのパズルの事は忘れないでおこう。

「ここはどうだろう……。」

窓付きたちを探しているうちに、わたしたちは3階へやってきていた。

ついでに、板を探して。

というのも、一回のとある廊下に穴があいていて、

そのままわたるのは少々危険そうだったからだ。

勿論、その奥に二人が行ったとは考えにくい。

だけど、二人を見つけること以外に大事なことがもう一つ。

脱出

はたして、穴のあいた道の先に、脱出へとつながる道はあるのだろ

うか。

もしくは、脱出なんて――

そこまで考えて、考えるのを止めた。

これ以上悪い考えはしないでおこう。

今は、脱出のことだけ考えよう――

今私達が持つヒントは――

洗剤――は、もういいと思う。

オイル切れのライター。どこかの詩の歌詞のようだが、そんなの意味が無い。

他には、すでに解いて使用済みの暗号ばかり。

正直、こんなに複雑に謎をちりばめた館で同じ暗号の答えをそう何度も使うとは思えないから、これも除外。

――なにもないなぁ。

――いや……、そういえば、

ポケットに入れておいた、二つの物を思い出す。

一つは、人形。

改めてみると、ひどく不気味だ。なぜか片方の目だけ赤い球が埋め込まれており、妖しく輝いていた。

もうひとつは、青い球。

人形の片目と同じように綺麗な球で、そのまま入れ替えられるように思えた。

残念ながら、人形の方はしっかりとはまっており、赤い球を外せない。

さらに、もう片方の目はなぜか黒くぬった木製の球で埋められていた。

と、いうよりは、球状に残しておいた部分を塗った、といった感じだろうか。

とにかく、この人形の両目はそろわない。

「――この部屋には、わたしたちだけで来ても意味が無い。行きましょう、うろつきさん。」

鬼が来る前に。

最後の一言は、ぼそりと呟くだけだった。

外は、ゴロゴロと雷が鳴っていた。

すれ違う謎（後書き）

探索回。ほとんどなにもやってないね。
こちらではおひさしぶりです、ＨＡＳＥです。私の集中力は５．３０秒です（短っ）

もうちょっと書こうかと思ったけれど、いったんここまで。

ではでは～（　・ω・）ノシ

素描人形（前書き）

半年以上たってからのおはこんにちばんは、H@SE、ハセです。
中身が薄い？　……いつものことでｓｙ（殴
では、ひゃーういーごーん←

素描人形

意外な形で、私達は合流した。

いや、この状況なら、以外ではなく、あるいは当然なのかもしれない。

ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人

それから逃げていた時のことだった。

全力で逃げている時に、偶然、部屋から出た所で合流したのだ。

ただし、まだ鬼は追いかけていた。

こんな形で合流しても、喜びは薄れる。

なんとも言えないもどかしさと、

なんとしてでも逃げ切るという感情が、

今の４人を支配していた。

どれほどか走って、ようやく鬼が消えた。

「もう……いや……。」

誰かが呟いた。だけど、誰もその言葉は耳に入ってこなかった。
みんな、同じ気持ちだ。
弱音を吐くなとは言わない。
むしろ、だれしもがその一言を口にしたかっただろうし、
その一言を、何度も吐いた事だろう。
だけど、
だからこそ、
「早く、ここから脱出しよう。」
わたしが、改めて決意を固めた。
お互いが、別れている間に見つけた手掛かりを出しあった。
さびつきとうろつきさんが、青く丸い石と、片目だけが赤い人形。
わたしとポニ子は、ライターオイル。
それとは別に――
「その丸い石――もしかして……。」

「何か心当たりがあるの？」

わたしの呟きに、さびつきが食いついた。

「うん。さっきの……え～っと……なんとか人形の部屋に」

「素描（そびょう）人形。」

「そう！　そのそびょう人形がいくつか置いてある部屋に、目がくぼんだ人形があったんだ。」

もしかしたら、これをはめ込むための物かもしれない。

後に続く言葉は、わたしが言うまでもなく、他のみんなに伝わったようだ。

「じゃあ、行ってみよう。」

「うん。こっちだよ。」

わたしとポニ子が先導して、あの部屋を目指し、歩き出した。

部屋を目指す途中で、ドライバーで止められた板の話を聞いたが、その事は、後回しにすることにした。

その部屋が三階にあり、目指す部屋が一階にあるからだ。

この要件がすんだら、すぐにそっちにも行ってみよう。

そう計画を考えていると、すぐにその部屋には着いた。

台の上で奇妙なポーズをとった素描人形は、

やはり、不気味でしかない。

その中から、両目がくぼんだ素描人形を選び、手に取る。

その目に、石をはめ込んでみた。

かちり

気持ちいいくらいそれはぴったりとはまったのだ。

「やっぱり……じゃあ、もう片方……って言っても確かそれ、外れないんだよね。」

「うん。」

もう片方とは当然、さびつきの持っている人形の片目につけられた、赤い石だ。

たぶん間違いなく、これをつけるんだと思う。

じゃあ、どうやってこれを外せばいい？

「どうすればいいと思う？」

う～ん……

４人が、一斉に唸る。

「……この赤い球を人形からはずせれればいいんだよね？」

最初に口を開いたのは、うろつきだった。

「え……うん。」

「じゃあさ、この人形を壊せばいいんじゃない？」

中々物騒な事をさらっと言っちゃうなこの人は。

――でも、そうなのかもしれない。

――って、

「どうやって？」

「やっぱりこう……『どかっ』と？」

……

……

……

『はぁ……。』

「ちょっ、何よそのため息！」

「やっぱり、うろつきさんはうろつきさんなんだなぁって思っただけですよ。」

「なんか、あんまりうれしくない言い方ねそれ。」

当然だ。

「まぁ、『どごっ』は無しにしても、人形を壊すのがいいのかなぁ。」

「でも、はめ込む都合上、形は維持しないといけませんよね？　どうやって人形を壊せばいいんでしょうか。」

ポニ子が、この意見の一番の肝となる部分に突っ込みを入れる。

そこが問題だ。

珠を壊さず、それでいて、珠『だけ』を取り除く方法。

当然、ハンマーなんかじゃそんなの無理だろうし、何よりまずハンマーが無い。

そんな都合のいい方法――

――あ。

「ねぇ……ポニ子……その人形、木製？」

「え？　う、うん。多分、間違いないと思うよ？」

「じゃあ、さ。こんなのどう？」

燃やす。って言うのは。

……私の考えは、単純なものだった。

木製の人形を、暖炉で燃やしてしまうと言うものだ。

そして、

「なるほど！　石の珠は燃えずに残る……ってわけか。」

「そういうこと。……っん、まだ熱いかな。」

『例の暖炉』にライターを使って火をつけて、そこに素描人形を投げ入れたのは、もう何分も前の話。

すっかり火は消え、人形も黒い灰となり、残ったのは、赤い球だけだった。

これを……さっきの素描人形にはめれば、きっと何かが起こる――はず。

そう信じて、彼女達は部屋を後にした。

例の部屋

言うまでもなく、素描人形のたくさん置かれた部屋だ。

「えっと――あった。」

そして私は、例の眼の窪んだ素描人形を手に取った。

それに、先ほど手に入れた赤い球をはめ込んでみる。

かぽっ

気持ちいいくらいに、それはしっかりとはまった。

「さびつき、確か青い球を持ってるって言ってたよね、貸して。」

「貸すも何も、もともと私のじゃないよ。はい。」

言いながら、さびつきから青い球が手渡される。

そして、それをもう片方のくぼみにはめ込む。

かぽっ

「――ぴったし、だ。」

……

……

……

……？

「なにも……起こらない？」

しんと静まり返った部屋で最初に口を開いたのは、いつものごとくうろつきさんだった。

あれ、本当にこれだけ？

……本当に？

「……。」

「……。」

「……。」

「……ゑ。」

ほ、本当にこれだけ？

てっきり、これをはめ込むことで何かが起こる物だとばかり思っていただけに、調子が狂う。

「う～ん……勘が外れた？　でも、ここ意外に使えそうな所も思いつかないし――」

そこまで言ったその瞬間、

人形に、異変が起きた。

――ボトッ

人形の頭が、

落ちた。

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

……ゑ。

「きゃあああ!?　く、首いいい?!」

「ちょ、ポニ子落ち着いて!」

突然の出来事に（なぜか）ポニ子が絶叫し、それをさびつきがなだめる。

そんなポニ子の絶叫に、わたしとうろつきさんがそろって肩をはね上げていた。

そんな中、不意にわたしたちは落ちた人形の首と眼があってしまった。

「……ひっ」

半泣きでわたしが短くしゃくり、無意識にすぐ隣のうろつきさんに抱きついていた。

――と、

「……あれ？」

その不気味な頭部に、どこか見覚えがあった。

もちろん、周りにある素描人形も全部同じ顔だがそれとは違うところで、だ。

えっと――あれは確か――

「……そうだよ、そうだったんだ。」

だから、頭だけとれたんだ。

「分かったよ……ポニ子、分かったよ！」

「ふぇ？　な、何が……？」

がっちりとさびつきに抱きつくポニ子が、ゆっくりとこっちを振り向く。

……よく見るとさびつきの顔色が悪い。ポニ子、容赦なく抱きつきすぎだよ。

御免さびつき、今はどうしようもない。

しばらくは、そこの天然エアバック（推定９３）を味わっていてください。

「分かったよ、なんで頭が落ちたのか。」

「な、なんで？」

涙目で問いかけてくるポニ子に、私は答えた。

「この頭は……あの解けないパズルを解くカギだったんだよ！」

「え！？」

驚いた拍子に、ポニ子がさびつきを離した。

……結果、さびつきがその場に倒れたのは、また別の話。

向かいの部屋に、わたし達は移動した。

扉のすぐそこに、それがある。

「なるほど、確かにこのパズルは絶対に解けないね。」

復活したさびつきが、例の絶対に溶けないスライドパズルを見る。

パッと見ただけでこれが『解けないパズル』と分かるのは、彼女の得意教科が数学だからだろうか？

それとも単に私の頭が悪い？
……否定できない。がくっ
「で、窓付き、これとその首、どう関係するんだい？」
「あ、うん。これを――」
さびつきに聞かれて、その手に持つ人形の首（不気味である）を――
「こうするの。」
パズルの頭の形をしたくぼみに、はめ込んだ。
かちっ
小気味良い音を立てて、頭は綺麗にはまった。
がたっ
今度は、すぐに音をたｔ
ガっ
「――～～っ！？！？」
……パズル板が音を立てて落ちてきた。
……、わたしの足の上に。

「まぁ、ドンマイ。」

痛みのあまりしゃがみこんでいるわたしの隣で、同じように腰をおろして同じ目線にいてくれる親友。

その後ろで、パズルの裏にあった扉を開けるうろつきさんの姿が。

「よかった、鍵とかはかかってなかったよ。どれどれ中身は……『3階の鍵』？　ずいぶん大味な鍵だね。」

まったくだ。

そういえば、鍵のかかった部屋があったな、間違いなく、そこの鍵なんだろう。

「じゃあ、そこに行くよ！」

「ちょ、ちょっとだけ……待ってくだ、さ、い……。」

結構ダメージのでかい、窓付きなのだった……。

素描人形（後書き）

このダメージを生かせるのかどうか、それは作者の腕にかかっている。

そんなわけで、別館編の謎解き回、如何だったでしょか。

まだ結構続くヨカーンを残しながら、わたしはここでお暇させていただきましょう。

ではでは～（・ω・）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8183r/

ゆめにっ鬼

2011年12月17日01時52分発行